

テーマ「豊かな人間性を育み、生徒一人ひとりの個性の伸長を図るキャリア教育はどうあればよいか」

1 〔視点2〕 継続教育機関との連携や地域・産業との連携したインターンシップのあり方

(1) 研究のねらい

本校は平成14年度に千厩東高校と千厩高校が統合され、「自主自立の精神に富み生涯にわたり学ぶ意欲と国際的な視野を持った、心身共に健康でたくましい人間を育成する」ことを教育目標とした生産技術科、普通科、産業技術科の併設校として、現在に至っている。全校生徒数693名が在籍し本年度「創立110周年」を迎えた。

生産技術科の生徒数は119名で、農業を学ぶ生産科学コースの生徒は1年16名、2年17名、3年18名、計51名が専攻している。併設校で農場の規模も小さく、校内のみで十分な教育活動を行うだけの設備や施設が整っておらず、生徒に先進的な施設や設備を使って体験させることや、多様な作目の栽培を経験させることができない。そこで地元の農業改良普及センターやJAの協力を頂き、更には地元農家の方々の協力を得ながら、生徒の興味関心を引き出し、技術・知識の定着を目指し生徒が自ら考え、多くの学習活動を通して成就感や体験を数多く得られる機会を作りたいと考えている。

(2) 本校における地域と連携した教育活動、関係機関との連携による活動

本校は、平成7年よりJAいわい東と一関農業改良普及センターの協力を得て、生産技術科の生徒に対してさまざまな見学・体験を含む研修を行ってきた。

対象生徒	主な研修内容	回数
生産科学コース	優良農家見学研修（2年生）{育苗関係（水稲・野菜・花卉）} {野菜・果樹・花卉の生産農家、畜産施設・農家}	5回

生産科学コース	現場体験実習（2年生）{農家実習（野菜・花卉）}	2日間
	東京中央卸売市場・流通施設視察（3年生） （地域産直、園芸集荷場、芝浦と場食肉市場）	1泊2日
生活科学コース	カマバタ織りの見学研修（2・3年生被服分会）	1回
	桑の葉の加工とその利用（2・3年生食物分会）	2回
	福祉施設および農産物流通研修（宮城県）（3年生）	1日
	アイスクリーム作り実習（3年生食物分会）	1回
生産技術科	ソバ打ち体験実習 「岩手県の農業の現状と今後の展望」（1年生） 講師：普及センター職員3名	1日 2時間

その他

生産科学コース	農業経営特別授業（3年）	10時間
生活科学コース	さつまいも交流学习	2回
	ふじの実学園との交流学习	3回

「地域の子供は地域で育てよう」という思いや、将来の地域の担い手として（東磐井地区）に腰を落ち着けてほしいとの願いから多くの方々の協力を得られ、以下の事業の実施が可能になっている。

(3) 平成23年度 生産技術科における校内・外の研修事業

ア 優良農家見学研修および現場体験実習（2年生）

地域の優良農家や施設にお願いし、各分野の農業経営について見学、体験させていただいている。農家の方々は親身になって説明、指導して下さる。その中で自分の体験談や将来の夢についても話され、農業に対する思いと、農業への理解が深まっている。

イ 流通施設視察および東京都中央卸売市場見学（3年生）

生産科学コースの3年生には流通関連施設の見学研修を行っている。道の駅での見学研修では地域の農業と流通の仕組みについて学ぶことができ、農業がもたらす地域の活性化についても理解を深めることが出来る。また、東京の中央卸売市場では生産地と消費地のつながりを理解すると共に農業が担う社会的役割についても学習している。

ウ ソバ栽培における地域交流

町内の愛好者で組織する「不思議な蕎麦屋の会」よりソバ栽培の依頼があり、生産技術科の生徒全学年が管理作業に携わっている。例年2回に分けて全員がソバ打ちの体験をし、大変良い経験が出来ている。今年度も取り組んでおり、全員がソバ打ち体験をする予定である。地域の方と交流し指導いただくことで、自分たちの地域を見つめるとともに、ソバ作り（栽培から管理）という新しい分野への理解も促進されている。

エ 福祉施設及び農産物流通と地場特産品の栽培

生活科学コースでは、農村文化伝承として被服分会ではカマバタ織りの研修を行っている。食物分会では桑の葉の利用とその加工について取り組み、桑の葉の新しい活用方法を普及するため、地元各地区の物産展にも出向き活動している。また、新しい利用とその効用について養蚕農家へ研修に出掛け講話と実演をいただき桑の加工について研究を重ね、地域活性化を目指している。

(4) 地域との交流

※ 本校では関係機関との連携のほかに学校独自の交流学习を実施している。これらの取り組みは生徒の地域理解、そして地域の生徒理解への一助となっている。

ア 生活科学コースの「生物活用」選択者と農業クラブ役員の活動として幼稚園と連携し、本校農場を利用したサツマイモの栽培を行っている。植え付け、収穫に約20名の園児が訪れ、生徒と実習を行なう。園児たちの農業への関心を高めると同時に、生徒の達成感・充実感もあり、最後は全員で焼き芋を食べ、園児たちも満足そうに帰っていく。

イ 知的障害者更生施設ふじの実学園との交流学习

生活科学コースの生徒が知的障害施設の利用者と農業実習を通して交流を行ない、理解を深めている。(年3回)

ウ 農業経営特別講習

J A職員により、流通にかかわる研修のまとめとして、特別講習をいただいている。

(6) 各種校外実習・事業を通して

(1) 連携事業（交流学习）の効果

ア 本校周辺地域は農業が盛んな地域（畜産・花卉）であり、地域との交流は農業との交流でもあるといえる。地域の協力があり行えることは、農業の社会的な意義や役割を理解するためにも有意義であると同時に、生徒が地域社会の中でどのように位置づけられ、必要とされているか分かる。

イ 本校の農場規模は小規模であり教材も限られている。また、畜産の廃止などで生徒が実際の経営に触れる機会が減った。そのため、実際に経営している農家や流通現場で学習できることは、学校では学べないことが事業を通じて学べるという点で大きな利点となっている。

(7) 今年度の課題とまとめ

(1) 各関係機関や地域とのつながりを強くするとともに、小規模校ならではの農業教育現場を目指し、将来の地域の後継者として必要とされ、更には農業の担い手として各県内地域において実践を行い活躍できるよう育成するため基礎・基本を重視して行っていきたい。

(2) 併設校ということもあり、生徒の多様な進路対応を考え普通科目の選択履修単位を増やして幅広い進路への選択を取り入れている。また、普段農場実習を行っている51名の生徒の負担は、大規模校に比べて大変大きなものになっているが、今後の農業教育においては、生産における実習はもちろんであるが、基本的な知識の習得、農業を取り巻く環境の理解、地域農業を取り巻く社会情勢の認識が必要であることを前提として取り組ませたい。

(3) 異なる学科が存在するため、普通科目への取り組みなどを考えると同時に、学科の特色を存分に発揮し、魅力ある農業教育を実践していくために今後も中学校側へのアプローチを行い学科の必要性を説明していきたい。

(4) 食の問題、環境問題など諸事情を正確に判断する力を養うことはもちろんのこと、社会における農業の役割や意義を理解し科の目標に掲げる「地域の進展に取り組むリーダーとしての資質と農業の担い手を育成と、豊かな生活を営む態度の育成」を行っていきたい。

2 「視点6」各校における特色ある教育について

(1) 研究のねらい

近隣地域の中学生徒減少による募集人員の確保も重要な課題となっている。そのため本校生産技術科においては、平成20年度から近隣地域の中学校をはじめ、隣接する宮城県気仙沼方面の各中学校に体験入学実施の案内をおこない、(概ね年1回の実施が大半であろう)本校生産技術科の学習内容や実際の体験を通して高校生活のイメージとして捉えてくれるよう中学生および保護者への機会として、体験入学を年3回開催している。

3回の実施を通して、中学生へ本校の実情の理解と進路選択の機会を多く提供することにより、本校生産技術科への選択動向を捉え、併せて入学後の学習意欲や高校卒業後の進路先への関わりを調査検証する。

(2) 研究・指導の方法

- ・ 中学校訪問を実施し、中学校教諭に本校の生産技術科を理解してもらう。
- ・ 体験入学実施にともなう内容の検討。年3回実施を踏まえた内容としておこなう。
- ・ 中学生の指導は在校生を中心に展開させる。

(3) 指導展開（実践）

1) 実践に至るまでの経緯

はじめに、本校における生産技術科の在り方を探る事を目的に、他県の併設校訪問を実施した。

2) 期 日 平成19年11月19日(月)～21日(水)

3) 訪問先 茨城県立石岡第一高等学校 明治34年創立(普通科6,園芸科1,造園科1)

埼玉県立鳩ヶ谷高等学校 昭和47年創立(普通科3,園芸科デザイン科1,情報処理科2)

千葉県立薬園台高等学校 昭和38年創立(普通科7,園芸科1)

4) 訪問目的

- ・本校同様に普通科と農業系学科が併設されている学校において、どのような生徒指導、進路指導が行われているか。
- ・併設(農業系生徒は少ない)の中で農場運営や農場規模はどのようになっているのか。
- ・関東圏という限られた土地の中でどのような農場経営がなされ、どのような施設が活用されているか。

5) 訪問報告(平成19年度復命より)

ア 茨城県立石岡第一高等学校

平成21年に100周年を迎える。農学校として創設されているが、現在は普通科が学校の中心適存在。今年度近隣の普通高校と合併。農業系2学科からは国公立大学、私立大学へ進学している。

農業系2学科、計6クラスは定員240名に対して163名の在籍になっており、1クラス以外は定員割れの状態であった。また、推薦枠は定員の50%である。問題行動の8割は農業系生徒であり、成り立たない授業もある。そのため、普通科生徒や普通科教員から不満の声も聞こえる。その対策として農業学科を理解をしてもらうため、普通科教員にはテスト期間中に農業体験を、普通科1年生には園芸科の3年生が農場案内を行っている。

イ 埼玉県立鳩ヶ谷高等学校

市内の住宅地にあり、周囲2km圏内には8校の高校があるため、生徒の奪い合いが激しい。学力は近隣では中位の下レベル。農業系の生徒は大学に数名、専門学校と就職が半分ずつ。農業系生徒の進学は農業系進学も一部あるが、大学、専門学校共に美術系が多い。

女子が全体の70%を占め、園芸デザイン科においては90%以上が女子である。科内での学力差が大きく、優秀な生徒が力を発揮できないでやる気を失ってしまうこともある。

平成15年度は園芸デザイン科は定員割れし、対策として出前授業の実施や年間5回の体験学習、管理職の学校訪問のほか、近隣施設への作品の展示などを行った。ジャスコや市役所へのオブジェの展示では1万人以上の方が作品を見ている。その結果、平成19年度は前期2.69倍、後期1.64倍の出願になっている。

授業の大部分はデザインや装飾関係で、農業の授業でありながら美術の先生が指導しているものもあった。特色はあるが内容が独自すぎて、人事異動があればやっていけるか不安だそうである。

ウ 千葉県立薬園台高等学校

普通科は県内130校中5～10番に入る進学校。

園芸科の生徒は普通科トップと同レベル(450以上/500)から500点中の2ケタまでおり、学力差は大きい。18年度の園芸科入学生は定員割れをし、また、進学校の名前のイメージだけで園芸科に入学してきた不本意入学もあって、問題行動が多発し、退学者も数名出た。このクラスだけは授業も成り立たず数名の先生方が入って行った。この時ばかりは園芸科に対する普通科生徒、普通科職員からの不満も出され、学科間の摩擦が生じた。

対策として年5回の体験入学（土曜日、2年も可、保護者も可、複数回可）の実施や、管理職による学校訪問、専用ホームページの作成などによって、不本意入学は無くなり、今年度はやる気のある生徒だけが定員以上に集まってくれた。現在はもちろん学科間の摩擦は行事、部活を通じて全く無い。

生徒指導、進路指導は学科が中心で行っており、進学に関してだけは普通教科の先生方に協力をいただいている。国公立大学は2～3年に1人くらい。

普通科3年生に選択科目で「農業科学基礎」があり、特に優秀な受験に余裕のある生徒が選択して、知識や体験の吸収をしている。

県の事業で校内にログハウス風の販売所を設置し、週3日、午後の授業内で販売実習を行っている。近隣住民が多数買い物にやってくる、科のアピールにもつながっている。

6) 所 感

訪問した3校は「本校に似ている学校」という理由で選定したが、普通科と農業科が併置している学校は本県同様、各県1校ないし2校程度しかなく、工業科までとなると探し出すのが難しい。その中で訪問先の3校が共通して苦勞している。また、熱心に行っているのが生徒募集であった。特にも葉園台高校では年5回の中学生体験入学を実施し中学生と保護者に対して園芸科を理解してもらうために行っている事や、鳩ヶ谷高校では、手作りオブジェを空間の装飾として近隣のジャスコや市役所に2週間ほど展示し、延べ人数1万人以上の方々に鑑賞してもらっている。この外部での作品展示をはじめたことにより、募集生徒数が年々伸びてきているなどである。

定員割れや不本意入学が起こると学科内には問題が生じ、校内での摩擦も生まれる。生徒の学校活動も充実したものにならない、そう感じた。

農場運営については、どの学校にも水田はなく、動物もおらず園芸部門だけが実施されていた。人的配置は恵まれており、本校農業科職員の負担の大きさを感じた。

各校とも、施設や設備には多額な予算が投入されており、必要なものは整えてくれる体制が出来上がっていることに關心すると共に、本県の財政難を思い知らされた。

7) 今後の課題とまとめ

3つの学校を訪問して感じたことの一つに、本校生産技術科生徒の「良さ」がある。「素直で明るい」生徒は手前みそながら本校が一番であった。これは是非大切にしていきたい。

今回、本校でも取り組める内容はないかと考えた時、「生徒が入りたくなる学科＝生徒募集」については努力をする必要があると感じる。すぐに新しいものを取り入れるのではなく、全国的にも自慢のできる「地域との連携事業」を中心に、学科の行事や進路などの現在取り組んでいる内容をもっとわかりやすく外部へアピールしていく必要があると思っている。

（4）体験入学実施計画について

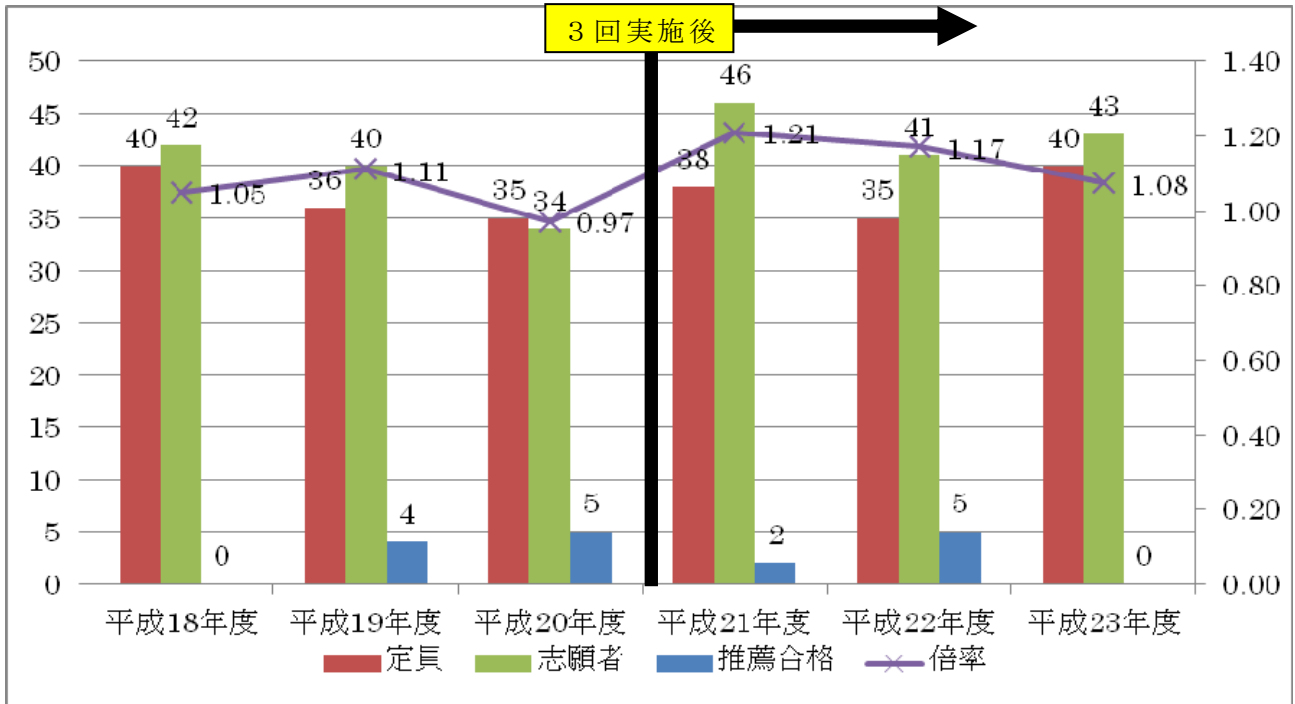
1) 訪問から得たことは、本校でも取り組める体制や実施内容はないかと考えた時、新しいものを何か取り入れ行うのではなく現状の授業や地域の連携を活かした内容で取り組む事が生徒募集につながるものであると考え検討した。

2) 7月の学校全体で行う体験入学においては、学校行事や生徒会活動・部活動がメインとなるので、生産技術科単独で行う体験入学では科の内容を充実させるようにすることと、中学生や中学校の指導者にも生産技術科における活動や授業内容について理解されるように考え、全体の体験入学の前と後

に行う事として計画を立案した。地域の中学校の行事予定を確認し前半は、6月中旬から下旬の普通日に行い、後半は休日を設定日として保護者も参加できる体制として9月下旬とし、計3回の実施で行うこととした。尚、対象は中学校3年生と2年生及び保護者とした。

3) 5月連休以降に各中学校を訪問し体験入学の実施について説明を行ったが、中学校により温度差はあった。

4) 生産技術科の入学者数の推移 「平成18年度から」



5) 「中学生及び引率者・保護者用プリントより」

ア) 6月実施の内容

9:00~9:10 学科の説明、連絡(本日の動きについて)
9:20~10:10

A班 農場体験 ~おつまみの王様「枝豆を植えてみよう」~
 ~憩いの空間づくり「プランターを作ってみよう」~

B班 家庭科体験 ~桑の葉を食べよう桑の葉を使ったお菓子作り~

10:20~11:10

A班 家庭科体験 ~桑の葉を食べよう桑の葉を使ったお菓子作り~
B班 農場体験 ~おつまみの王様「枝豆を植えてみよう」~
 ~憩いの空間づくり「プランターを作ってみよう」~

11:20~
研究発表 **「作物分会」 ~生産技術科研究発表「BDFとは?」**

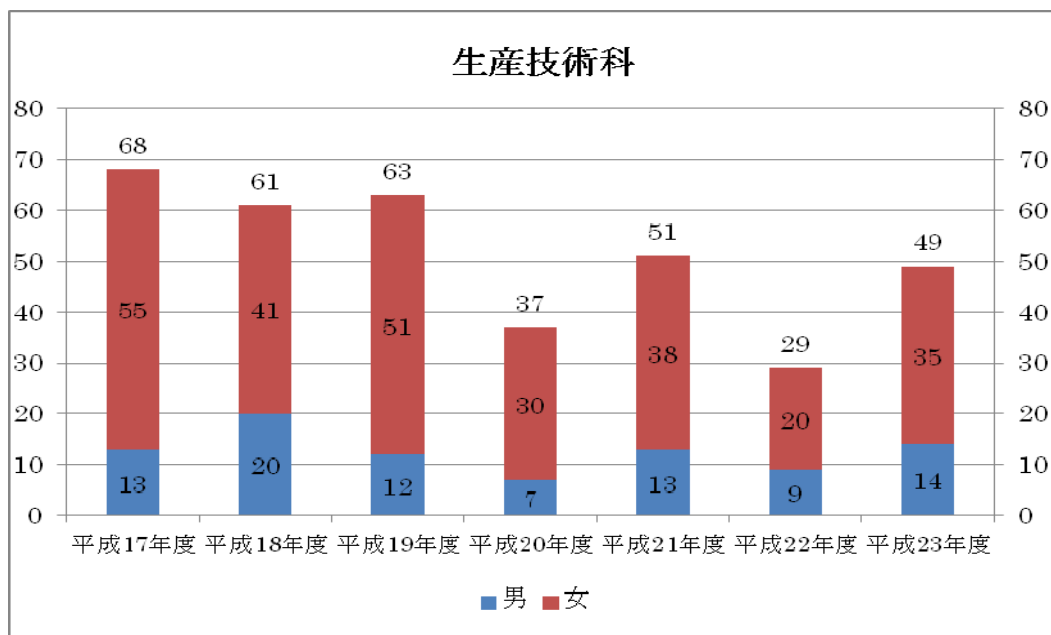
発表終了後 体育館集合 アンケート記入後

12:00 解散※保護者の方もどうぞ一緒に参加して下さい。

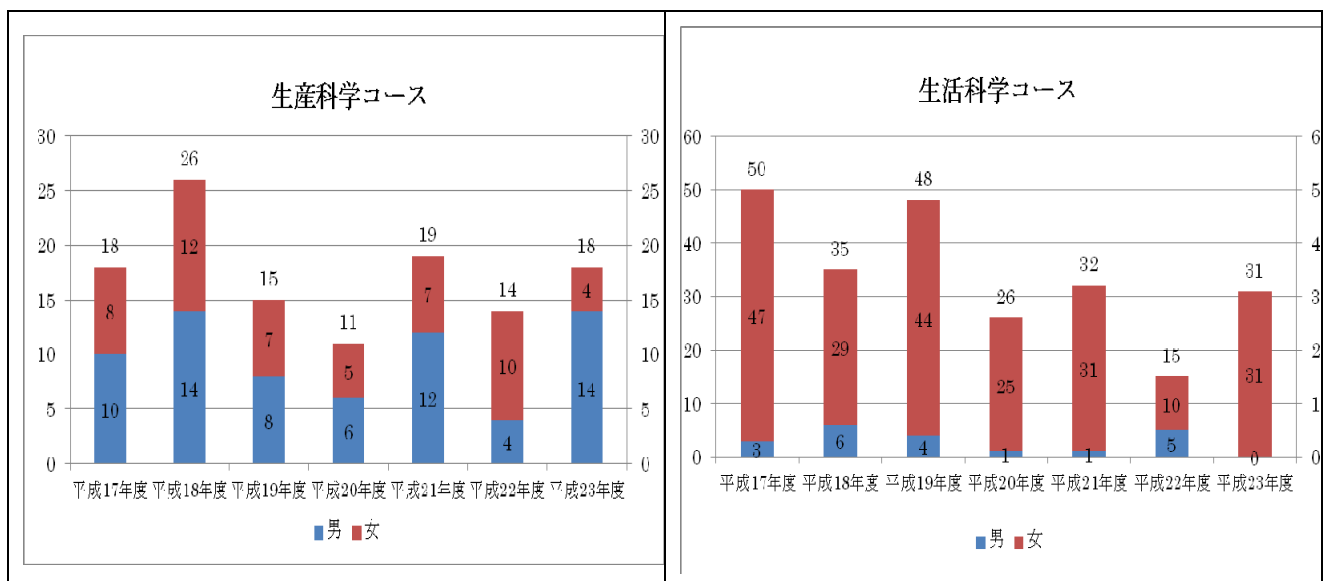
イ) 7月実施の内容

講座名	学習内容	講座
生産科学コース 「自然の緑に囲まれて、自然と共に生きる力をつけよう！」	園芸実習「フラワーセラピーの力」	A
	農業機械実習「重機いっぱい機械の力」	B
生活科学コース 「ミシンと包丁の達人！」	被服実習「被服製作技術検定作品紹介・手芸作品の制作」	—
	調理実習「食物調理検定4級実技試験」	—

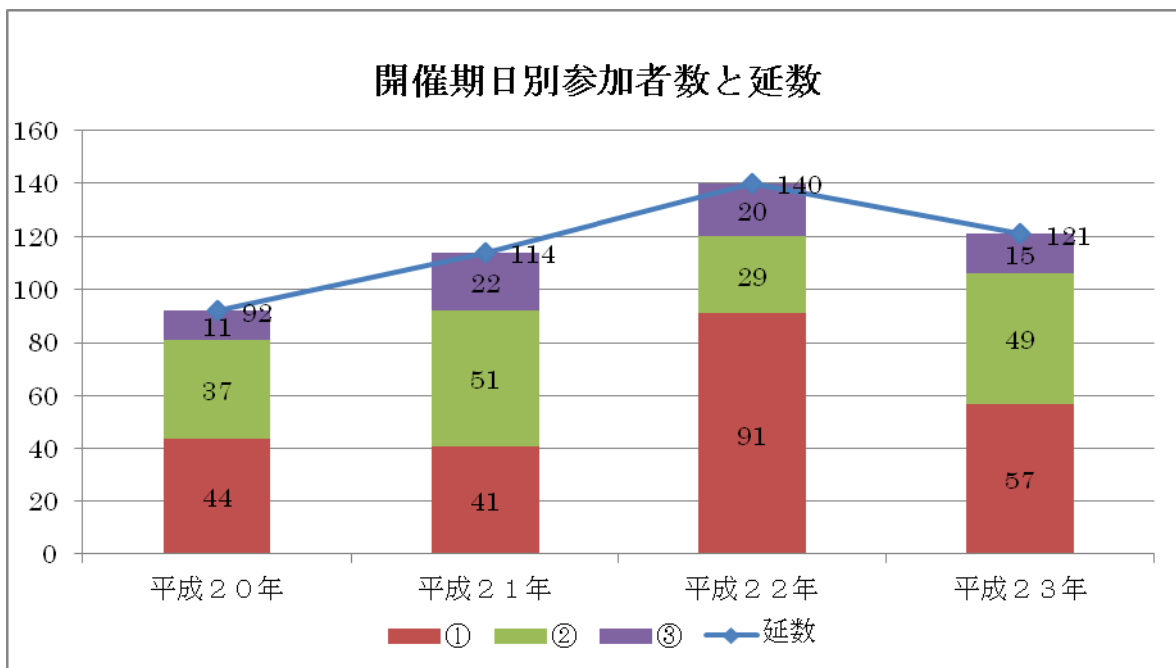
6) 7月実施（全校実施時の体験入学者数）



7) コース別人数



8) 生産技術科で体験入学の実施後参加者数

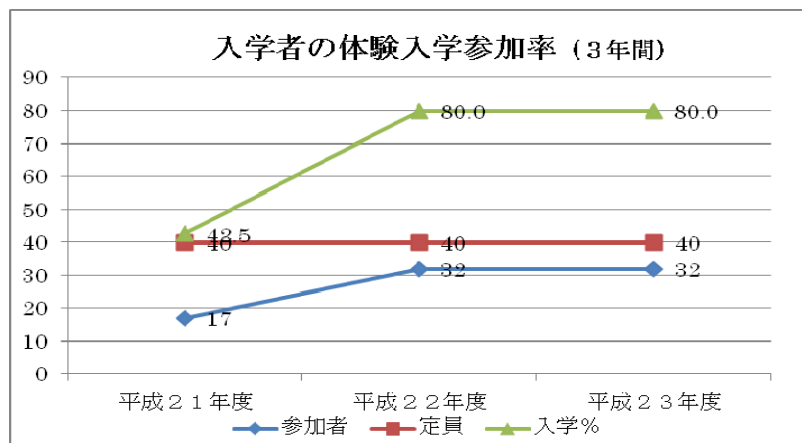


※1 表の棒グラフは、年度別の総延べ人数であるが、3回実施で重複する生徒も含まれる。

※2 グラフの①は6月実施、②は7月全体実施、③は9月実施の参加人数である。

(5) 参加者の入学率 (分析)

1) 20年度から年3回の体験入学を実施し、体験参加者の約80%が入学している状況である。特に本年の3年生は体験入学を3回実施後、はじめの入学生であるが、入学後の進路目標に関する意識は比較的に高い傾向で、一人ひとりが意欲的であることから、就職・進学共に既(12月現在)に100%達成である。



2) 3回の実施により本校全体で実施している体験入学時の参加者が減少してきているが、中学校によると、生産技術科が3回実施することが周知されてきているため、6月の1回目と9月の3回目の体験入学に参加するため、本校全体の体験入学時は、普通科、産業技術科あるいは、管内高校の体験入学に参加しているとの事から、参加者数は大幅な変化はない。

3) 体験者アンケート結果

実施後はアンケート記入を行い、今回の実施を知ったきっかけや、生産技術科「生産科学コース・生活科学コース」の体験学習について体験学習に参加した動機の項目を挙げ、回答している。

実施を知った理由としては、「担任から」が最も多く、動機については、当初「友達に参加するから」「中学校の先生に勧められたから」「保護者や家族に勧められたから」がみられたが、年々回数を重ねるうちに「生産技術科に入学を希望しているから」「興味があるから」「家庭生活に関することが好きだから」の回答が上位になる傾向にある。

(5) 課題とまとめ

- 1) 開催時期の検討が必要であり、中学校側からの要望等に応えられるよう日程の調整が問題である。
- 2) 生産技術科で体験学習が行われていることが定着してきているがその反面、6月下旬（平日開催）実施では、中学校において希望者を募れば授業が成り立たず、全員参加させる状況もあり、対応以前に検討が必要である。
- 3) 実施から3年目を迎えるが、中学校側の理解と地域の理解を得るためには、入学後の進路目標達成が重要である。

※「参考資料」

平成23年度 生産技術科進路結果（12月5日）現在

★就 職

管 内

株式会社 日ピス岩手（2名）、株式会社 オヤマ（2名）、株式会社及友技建、
J Aいわい東農業協同組合、丸紅造園、室根孝養会（2名）、フジテック岩手、
スキルギャランティ、株式会社岩手サントップ、株式会社斎藤松月堂（ホテル）、
磐井観光（瑞泉閣）

計14名

県 外

日本レストランシステム株式会社、株式会社SANTOKU（三徳）、伊藤製パン株式会社、
株式会社カスミ、ヤマザキ・ナビスコ、山崎製パン株式会社、ヨークマート、オオゼキ（2名）、
株式会社アストリア、株式会社パスコ敷島製パン、東京エアポートレストラン、
株式会社オノ・エーワン、月島食品工業株式会社、陸上自衛隊（自衛官候補生）

計15名

★進 学

【四年制大学】

弘前大学農学生命科学部

【専門学校】

専修大学北上福祉教育専門学校福祉介護科（2名）

仙台医療福祉専門学校保育介福祉護学科

仙台医療福祉専門学校医療事務

ドレメファッション芸術専門学校服飾造形学科

仙台ビューティーアート専門学校ウェディングプランナー科

東京ビューティーアート専門学校トータルビューティーカー

計 8名

在籍37名